第 74 回　MINAMATA、今も

ＩＴ生

水俣病の写真報道で名をはせた米国の写真家、ユージン・スミスを描いた映画「MINAMATA」が封切られ、福島原発、SDGs ブームとあいまって、水俣が再び注目されている。

９月に文藝春秋から出版されたユージン・スミスの評伝「魂を撮ろう」を読むと、水俣病をめぐる経緯が分かりやすい。

世間の耳目を集めた 1960～70 年代当時の、水俣病の原因となる有機水銀を垂れ流したチッソ、政府や地元自治体、御用学者の対応をみると、現在の北朝鮮を笑えないほどの後進性が感じられる。

映画の公開でブームとなりつつある水俣病。構造的暴力は形を変え今ものこる

いち早く有機水銀説をぶち上げた熊本大学医学部への妨害工作はお笑い種としかいえない。結局裁判では、熊本大の説が採用されて、被害者らが勝訴するのだが、判決では、チッソの対応は「公序良俗に反する」とまで断じられた。

しかしながら、水俣病をめぐる国家権力とその周辺の、国民に対する暴力構造は今も変わらない。情報化社会となって、火の手があちこちからあがる時代になって、修正のスピードは速くはなっているが、根底にある後進性は今も変わらない。

このところの水害で、限界にきているとされる、土の堤防など最たるものだろう。
鋼管杭を壁状に並べる「破堤しない堤防」が開発されているのに、流されても、流されても、幼子が砂場で遊ぶがごとく、土を盛っている。国会でも、毎度田畑が流される農水省からも苦情が出始めた。長野の千曲川では、土の堤防の仮復旧に「破堤しない堤防」を使いながら、土の堤防が復旧すると、「破堤しない堤防」をわざわざ取り外した。地元住民が抗議したが行政は、ろくな説明もせず、結局後の祭りである。

気象庁もしかりだ。避難に効果がないのに、住民に理解しがたい災害情報を垂れ流している。命を落としても理解しない住民が悪いといわんばかりだ。

歴史は繰り返すという言葉は使いたくはないが、いわゆる「強固な岩盤」が存在することを知っておくことは、無駄な努力を回避し、知恵を働かせることに尽力することにもなる。しかしながら「権力」なるもの頭の悪さには辟易してしまうのもやむを得ないだろう。

（令和 3 年 9 月）